

すべては未来の子供たちのために

Heart & Smile

【ハート&スマイル】 Vol.4 2015 June

FREE



シリアからヨルダン・アンマン郊外に逃れ、UNHCRの支援を受けて避難生活を送る少女たち。授業が終わって皆で遊ぶ。

©UNHCR/S. Baldwin

笑顔の達人 インタビュー 渋谷ザニーさん「元ミャンマー難民のファッションデザイナー」
笑顔を作る町 京都府相楽郡和束町「茶畑で国際交流を深める」
企業のCSR活動報告 KDDI「豊かなコミュニケーション社会を目指して」



シダックス
総合研究所出版

この用紙は無塩素パルプと植林木を使用しています。

FREE



SHIDAX Heart & Smile プロジェクトソング

SMAPO

「ユーモアしちゃうよ」



2015.2.18 発売!!

シダックス限定盤CD「ユーモアしちゃうよ/華麗なる逆襲」NZS-559/1,500円(税別)

収録曲: M1 ユーモアしちゃうよ/M2 華麗なる逆襲/M3 ユーモアしちゃうよ (back track)/ M4 華麗なる逆襲 / (back track) DVD ユーモアしちゃうよ (Music Video)
封入: SMAPO(スマポ)用シリアルコード / SMAPO(スマポ)記念カード
※シダックス限定盤は、初回限定盤B (VIZL-1222)と収録曲・特典DVDは同内容となり、オリジナルジャケット仕様となります。



私たちシダックスグループは、生きることを幸福につなげる「人と人の絆」を支え、
真心を込めて世の中の「大切なこと」を提供しつづける健康創造企業です。

はぐくむ、大切なことのすべて

SHIDAX
<http://www.shidax.co.jp>



Heart & Smile メニュー

ゴロゴロ野菜の旨うま塩麴中華飯

白菜やピーマン、レンコン、ペーパーコーンなどの他に、季節の野菜であるタケノコを加えた、中華風あんかけごはん。塩麴の優しい味わいが、素材の味を引き立てています。



プロジェクト活動レポート

世界中の子供たちや若者たちのために、そしてお客様の笑顔のために、今できることを！
シダックスグループの店舗、施設で取り組む「Heart & Smileプロジェクト」の活動をレポートします。



スタッフ一丸で笑顔と食事のサービスを

カフェテリア「ラ・フローレスタ」

東京都目黒区下目黒1-8-12 アルコタワー2F



1



2



3

1 開店と同時に次々とお客様が来店。
2 多くのお客様が「ゴロゴロ野菜の旨うま塩麴中華飯」を注文。3 目黒川を臨む明るい店内に、お客様の笑顔が広がります。

シダックスグループでは、オフィス、学校などで食事提供を行う約850の受託運営店舗・施設において、この4月から月に一度のペースで「Heart & Smileメニュー」の提供を開始しました。
この活動は、食事を通じてお客様にもご参加いただける社会貢献活動で、お客様が対象メニューを注文すると、1食につき10円をシダックスが国連UNHCR協会に寄付します。そして集まった寄付金は、国連UNHCR協会を通じて世界の難民問題解決や、未来の子供たちのための支援につながります。
今回は、受託運営店舗の1つで、「Heart & Smileメニュー」を提供する、東京都目黒区のオフィスビル・アルコタワー2Fにあるカフェテリア「ラ・フローレスタ」を訪れました。
メニューは、グループのメニュー開発室がレシピを作成した「ゴロゴロ野菜の旨うま塩麴中華飯」。140g以上の野菜が摂取でき、現代人の慢性的野菜不足に配慮したメニュー

「当店では初めての試みなので、どのくらいお客様に興味を持っていただけたのかわかりませんが、「美味しく健康に良いものを食べて、その結果社会貢献につながった」と実感していただければと思っています」
予定では70食でしたが、それを大きく上回る100食近くを提供。お客様から「美味しそうなので注文したんですが、あとからポスターに気付いて、寄付のことが知りました」という声もあがるなど、少しではありますが、本プロジェクトの取り組みが伝わった模様。「次回はポスターの貼り方などを工夫して、もっとアピールしていきたい」と、スタッフ一同張り切っています。



「Heart & Smileメニュー」のポスターやサンプルを展示。



ハート&スマイル

すべては未来の子供たちのために

世界は子供たちの「笑顔」でできている。

世界中のすべての人、一人ひとりの心の中には「想い」があります。それは、子供への「想い」。親への「想い」。パートナーや隣人への「想い」。

それが真の心——「真心」です。

未来を担う子供たちの「笑顔」を創りたいという「真心」。

私たちは、そこから世界を変えていくことができる。

シダックスはこの想いのもと、賛同企業とともに

国連UNHCR協会（国連難民高等弁務官事務所・日本委員会）を通じて、

日本と世界に「笑顔」と「真心」を広める活動を行います。

それが「Heart & Smileプロジェクト」です。

そして、この冊子は「真心」を持って

未来に向かう人々を応援していきます。

Heart & Smileプロジェクト 特設サイト

<http://www.shidax.co.jp/heartandsmile>

Heart & Smileプロジェクト

「Heart & Smileプロジェクト」とは、不透明な社会環境の中で、世界中の子供たちや若者たちのために、夢ある笑顔と真心あふれる未来を実現するための“一歩踏み出す勇気”を応援するプロジェクトです。

■主催：シダックス株式会社

■主旨：本プロジェクトは、社会問題解決と事業活動を融合する「ソーシャル・マーケティング」を体現した、シダックスグループ初の試みです。国連UNHCR協会を通じて紛争や迫害により故郷を追われた難民への寄付活動や社会啓蒙活動など、シダックスグループの店舗、施設において複数のプロジェクトを展開しています。

Heart&Smile Vol.4 Contents

- 03 Heart & Smileプロジェクト活動レポート
スタッフ一丸で笑顔と食事のサービスを
カフェテリア「ラ・フローレスタ」（東京都目黒区）
- 04 Heart & Smileが選ぶ「笑顔の達人」
元ミャンマー難民・ファッションデザイナー「渋谷ザニーさん」
- 08 UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)活動報告
難民の新たな人生を支援する3つの恒久的解決
- 11 Heart & Smileが選ぶ「笑顔を作る町」
日本茶の魅力を世界に発信する「京都府相楽郡和束町」
- 14 社会貢献活動を推進する企業
「KDDI株式会社」
- 16 Heart & Smileが提案する「健康が笑顔を作る」
エクササイズ／セルフ・リラクゼーション／健康レシピ



Change your Life.
Change the World.

笑顔の
達人

笑顔あふれる世界を作るため
がんばっている人を紹介します!

難民について、知ってもらいたいこと。
それが僕のライフワークになっています。

渋谷ザニー

(ファッションデザイナー)

「僕は、元ミャンマー難民」と、穏やかに語る渋谷ザニーさん。幼少期の思い出から、母国を追われ、難民認定を受けるまで、そして今、難民という言葉に思うこと。——。実験から生まれた率直な言葉の数々が、胸に響きます。

活動家だった父を追って
母と2人、日本へ

僕は1985年、ビルマ（現在はミャンマーに改称）の首都（当時）ヤンゴンに生まれ、祖父母と両親、叔父叔母たちと大家族で穏やかに暮らしていました。その生活が一変したのは88年、クーデターによって軍事政権が成立したときです。民主化要求デモに参加していた父は、活動家として狙われるようになり、ある晩、ビルマから姿を消しました。3歳だった僕は、20代前半の若い母とともに父不在の生活を強いられることになりました。

それから5年たったある日、母の元に「父は日本にいる」という連絡が入りました。母はすぐに、私を連れて日本に行く、という決断を下します。僕は「父を迎えにいき、連れて帰る」と聞かされていましたが、実際はそんなに簡単なことではあり

ませんでした。母と僕は、国外追放という形で、片道切符を手に、日本に渡ってきたのです。

日本では3年生から小学校に通い始め、テレビアニメを見ながら日本語を覚えました。10歳のときに難民申請をしました。10歳のときは難民という意識はほとんどなかった。たしかに、偏見を含んだ目で見られ、差別を受けたりしたことはあります。でも、僕はそれが「自分が難民であるせいだ」と考えたことはありませんでした。

難民という集団ではなく
自立した自由な人間でありたい

高校1年生のとき、僕は両親とともに東京・青山にあるUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に向かいました。難民認定に必要な情報を得るためです。いかにも渋谷の若者というふうなブレザーの制服を着

崩して、「何を話せばいいの？」という軽いノリでいた僕とは対照的に、両親は非常に真剣でした。ここで、僕たち家族はようやく難民認定を受けられることを知りました。

その帰り道、オリブの葉のマークがついた国連の門をくぐった瞬間、僕の心に唐突に「今日から自分は難民なんだ」という意識が湧いてきました。でも、そんな僕の隣で、両親はいつも増して堂々として見えました。2人は日本で懸命に生きてきた。それが認められたから、正式に難民認定が受けられたのだと、自分たちが歩んできた道に誇りを持っていたのだと思います。あのときの両親のきりっと引き締まった表情は、強く印象に残っています。

しかし僕自身についていえば、今も「難民」という日本語に若干の違和感を抱いています。難民という言葉には「民」という文字が入っていますが、難民という民族、集団は存

在しないというのが僕の考えだからです。また、現実問題として、たとえばミャンマー難民とアフリカ難民では、難民になった原因はまったく違いますし、たとえ同国人であっても、考え方や境遇はそれぞれ異なります。ですから僕はずっと、「難民」という集団ではなく、個々が自立して、人間らしい生き方を獲得するべきではないか」と考えてきました。

UNHCRは、難民という集団を救済することではなく、難民問題を解決することを目的に活動しています。僕もその考えを知って深く共感し、UNHCRのプロジェクトに参加して、さまざまな場面で難民としてのこれまでの体験をお話しさせていただくようになりました。日本にも多くの難民がいる中、僕が難民について語るという役割を与えられたことは、1つのご縁。これからもライフワークとして取り組んでいくつもりです。

ミャンマーで刻み込まれた色彩感覚や、難民としての経験、日本のファッション業界で得た経験、そのすべてが僕の創作活動の源。そこから生まれた作品を通して、1人でも多くの人にミャンマーや難民に関心を知ってもらえたら、と願っています。



Change your Life.
Change the World.

笑顔の達人

撮影場所: スフィア オブ ハビネス
〒151-0052 東京都渋谷区神宮前6-27-8 京セラ原宿ビル2F
☎03-6696-4339

ファッションを媒介にもっと難民を知ってほしい

僕が、「難民」という言葉を強く意識したことが、もう一度だけあります。それは2014年に、20年ぶりにミャンマーに帰ったときのことです。飛行機から降り、地に足をつけた瞬間(※1)、ミャンマーへの愛着が自然にこみ上げてきて、まるで母胎に戻ったような温かさを感じました。それと同時に風が吹き抜け、それまで身にまとっていた「難民」という衣がさっとはがされたように感じました。「僕はもう難民じゃない！」。そんな想いが心の底から湧き上がってきたのです。あのときの喜びは今でも繰り返し思い出します。あれほど感動が味わえたのなら、それまでの難民としての生活は、無駄ではなかったと思えるほどです。

当然のことですが、誰も、自ら選んで難民になつたわけではありませぬ。何らかの事情で生まれた国を追われ、他国で受け入れられて初めて難民となります。同じように、難民でなくなることも、自分では選ぶことはできません。僕の場合は幸いなことに、母国に帰ることができて、難民ではなくなりました。しかし、

社会情勢が許さなければ、そうすることはできなかつたでしょう。

難民になることも、それをやめることも、自分の意志で選ぶことができない運命のようなもの。僕は今もその運命を背負って生きています。ただしそれは決して、ネガティブな意味だけをもっているわけではありません。なぜなら、日本にも中国や韓国などほかの東アジア人もいて、それぞれが、それぞれの事情をもって生きているからです。そんな中で、難民であったことは、僕の経歴の1つであり、個性のようなもの、と今は考えています。

2つの国で育まれたアイデンティティを糧に

以前、ファッションデザイナーの大先輩で、恩師でもある桂由美先生に、日本の結婚式について教えていただいたことがあります。「昔の結婚式は、隣近所はもちろん、町や村を挙げてお祝いするものだった。花嫁行列を見に、遠くから子供たちが走ってきたりしたのよ」と何って、「僕もその光景を知っている！」と驚きました。ミャンマーにいた8歳までに親戚の結婚式に2回出席した

ことがあり、そのときの様子が先生のお話とシンクロしたのです。婚礼のにぎやかさ、女性たちが纏うロンジー(ミャンマーの民族衣装)の華やかさ……その様子は今も、僕の記憶にはっきりと刻み込まれています。それから、4月の水かけ祭り(ミャンマー暦の新年を祝う祭り)。昔は、女性たちはきれいな色の衣装を身に着けて、しとやかに踊っていたのですが、今はビキニを着る人もいるそうで、そんな話を聞くと、自分の覚えていたミャンマーとは違々と、少し寂しく思ったりもします。

そういう意味では、僕は同世代の日本人が知らないこと、たとえば家にテレビが設置されたときの喜びや、停電の後によく電気がついたときのほっとした気持ちも経験しています。それに、初めて電車に乗ったときのワクワクした思い出も！6歳か7歳のとき、母や祖母と一緒に、旧日本軍が作ったSLに乗ったんです。星空がきれい、ずっと外を見ていたら、「危ないから」と祖母が木製の戸を閉めてきて、振り向いた僕の顔は、煙の煤で真っ黒。同世代の日本人にとっては、おとぎ話のような風景かもしれません。ミャンマーと日本、2つの国で生

活したことで、僕は30年の人生で、産業革命以降の200年を凝縮したような体験をすることができました。もし難民でなかったら、これほど多彩な経験はできなかったかもしれません。

これからの夢はやはり、ファッションの道を進み続けることです。その中で、僕のデザインやプロデュースしたものを手に取ってくれた人が、「このドレスをデザインしたのは、どんな人？」と興味をもってくれて、それをきっかけにミャンマーや難民を知ってもらえるなら、それは素晴らしいことだと思っています。



渋谷ザニー しぼやにー

1985年、ビルマ(90年にミャンマーに改称)の首都ヤンゴン(現在はネピドー)に生まれる。3歳のときに軍部のクーデターにより軍事政権が成立。民主化を支持する両親とともに、軍事政権の弾圧から逃れるために8歳のときに日本へ。10歳で難民申請し、16歳のときに認められた。高校時代からモデルとして活動し、亜細亜大学国際関係学部ではアメリカ外交を専攻。現在は、新進気鋭のファッションデザイナーとして、映画、ドラマ、ミュージシャンのステージ衣装、レーシングチームのユニフォーム、ウェディングドレスなどを手がける。また、デリリーウェアからイブニングドレスなどのデザイン企画も行う。2011年11月1日に「株式会社渋谷ザニーファッションエンターテイメント」を立ち上げ、「ZARNY」ブランドを展開。さらに、完全顧客向けのオーダーメイドデザインのほか、海外ブランドをアジア圏内・日本国内で展開する際の商品のサイジング、スペックデザインのアドバイスも行う。UNHCRの公式支援窓口である国連UNHCR協会広報委員としても活動し、2008年以降、TIMES誌やフランスのAFP通信、NHKでもその活動が取り上げられる。

※1 ミャンマーが民主化されたため、入国が可能となった。



©UNHCR/N. Lukin
〈 祖国コンボ→定住国モンテネグロ 〉
モンテネグロの新しい家を早く居心地の良い場所にしたいと願うテフィクと家族。



©UNHCR/A. Kirchof
〈 故郷ブルンジへ帰還 〉
母親と7年ぶりに再会したステラ。

子供たちの笑顔を目指して。
UNHCR 活動報告

難民の新たな人生を支援する、3つの恒久的解決。

6月20日は「世界難民の日」(World Refugee Day)です。この日は、難民の保護と援助への世界的な関心を高めるために制定されました。「世界難民の日」を前に、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の活動への理解を深めるため、UNHCRが目指す3つの恒久的解決についてお伝えします。

UNHCRが目指す3つの恒久的解決とは？

UNHCRは、1950年12月14日の設立以来、世界各地の難民の保護と支援のため、世界約125か国で、約4290万人の支援に従事しています(2013年末時点、約7000人の職員が従事)。近年は、アフリカの問題に加え、シリア内戦により未曾有の数のシリア難民が発生し、支援の必要性がますます高まっています。

UNHCRの援助活動には3つの段階があります。第1段階は、ほとんど何も持たず避難してきた難民を保護する緊急支援です。難民キャンプを設営し、テント、毛布、水、食糧、医療、生活用品などの援助物資を支給します。第2段階は中長期支援です。長期化する避難生活の中で、将来の自立を目指す、教育、職業訓練、メンタルケアなどを提供します。

そして、第3段階として、故郷への帰還など、難民の未来と新しい暮らしを支援する、恒久的解決があります。

恒久的解決として最も望ましいのは、平和が戻った故郷に帰還することです。しかし、長年の紛争により破壊された地域での生活再建は容易ではありません。故郷への帰還が叶わない場合は、避難した国や他の国へ定住するという解決方法も考えられます。今回はUNHCRが取り組む恒久的解決について、故郷への帰還、第一次庇護国での定住、第三国への定住という、具体的な3つの方法について、実話をご紹介します。

① 故郷への帰還 永遠に会えないと思っていた 母親の7年ぶりの再会

中部アフリカにあるブルンジでは、1990年代に始まった民族間の対

立により、多くの家族が避難を余儀なくされました。当時5歳だったステラは、避難の過程で、両親や兄弟と引き裂かれ、他の家族に預けられることに。大虐殺がエスカレートし、タンザニアに逃げるようになったステラは、それから7年もの間、両親と音信不通になってしまいました。

平和が戻ったブルンジに難民が帰国し始めた頃、ステラの母のイドシアは、娘を探し出すための支援を受けられると知り、国際機関に助けを求めました。UNHCRはすぐに、両親が住む村から100キロと離れていない難民キャンプに、ステラがいることを探し出しました。そしてステラとイドシアは、7年ぶりに再会を果たしました。「長女が戻ってきてとてもうれしい。あの子を産んだときよりもうれしいわ」と、感動的な再会を経たイドシアは語ります。ステラの家族は、今後もUNHCRと国際救済委員会のサポートを受け続けます。それらのサポートは、教育や医療、帰還後のフォローを目的とした訪問などを含みます。

② 第一次庇護国への定住 父として働き、家族を守り、 永住権を取得

1999年、テフィクは家族とともにコンボからモンテネグロに避難しましたが、財産や身分を証明できる書類は、すべて祖国に置いてきてしまいました。公式な書類を持っていないことは、難民にとって大きな障壁となります。避難国に正式に認

められないと、安定した生活が営めないからです。テフィクは職を見つけて働き始めましたが、書類を手に入れるためには、8人の家族を養いながら、コンボへの旅費と書類の発行にかかる税金を捻出する必要があり、それはほぼ不可能なことでした。テフィクが書類を手に入れ、外国人認定申請ができたのは、UNHCRやモンテネグロのNGOなどが、支援のために手配したコンボ訪問バスのおかげです。さらに、2014年5月には、コンボ共和国内務省が、身分証明書の申請書類を回収するために、4つのチームをモンテネグロへ派遣。彼らの手助けによって、テフィクを始めとする400人の難民が、モンテネグロへの永住権を取得することができました。「家族の将来について、ちゃんと計画ができるようになりました。将来良い仕事に就くことができるよう、子供たちを全員学校へ行かせることが私の一番の願いです」とテフィクは語ります。

③ 第三国への定住 言葉の壁を乗り越え、 医師を目指す青年

26歳のカマルは、ルーマニア北部にある仕立て工場に働いています。彼は両親を置いて故郷のイランを逃れたため、家族を失いましたが、同僚やこれまで出会った同郷の人々が、その代わりになっています。トルコやブルガリアを越える危険な旅を経て、ルーマニアへたどり着いたカマルは、庇護申請をして、2012年

笑顔を作る町

世界の人々を笑顔にするため
がんばっている町を紹介します!

京都府の南に位置する相楽郡和束町。世界各国からの観光客が多い京都の中心部からはかなり離れた場所でありながら、「ここにはたくさん外国人たちが訪れます。その目的は日本茶。和束町では、海外からの旅行者、インターシップ生などを積極的に受け入れる、さまざまな取り組みが行われています。

京都府相楽郡和束町
日本茶の魅力を、世界に向けて積極的に発信



©UNHCR/G. Leu
〈 祖国イラン→トルコ、ブルガリア→定住国ルーマニア〉
仕立て工場で働くカマル。

子供たちの笑顔を目指して。
UNHCR 活動報告

に難民として認められました。数ある困難の中で、最初にぶつかったのは言語の壁。商店などで買い物をする際は、商品を指差して相手に伝えなければなりませんでしたが、しかし、地元の店員がすぐ彼の味方になります。「店員は、これは「パン」、言ってみて。」という具合に付き合ってくれた。そうやって言葉を覚え、「店員は、これは「パン」。今となってはルーマニア語を流暢に操ることが出来ます。

カマルの本当の夢は医師になることです。避難の際に、高校の卒業証明の書類をイランに置いてきたために、ルーマニアの大学に入学することができずにいました。しかし、今年初め、地域の自治体が、成人教育プログラムを受けるための手助けをしてくれました。近い将来、大学への道が開けることでしょうか。カマルは、医師になるという夢が叶うと確信しています。

ご寄付のお願い

特定非営利活動法人 国連UNHCR協会



UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は1950年に設立された国連の難民支援機関です。紛争や迫害により故郷を追われた難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に向けて働きかけています。この国連の難民援助活動を支えるため、広報・募金活動を行う公式支援窓口が、国連UNHCR協会です。皆様の温かいご支援を、心よりお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みは
ウェブサイトからお願いします。
※ご寄付は
税制優遇の
対象になり
ます。

国連 難民 検索

国連UNHCR協会の公式アカウントご案内



©UNHCR/N. Cubbin

「世界難民の日」とは?
2000年12月4日、国連総会で、毎年6月20日を「世界難民の日」(World Refugee Day)とする旨が決議されました。この日は、もともとOAU(アフリカ統一機構)難民条約の発効を記念する「アフリカ難民の日」(Africa Refugee Day)でしたが、改めて、難民の保護と援助に対する世界的な関心を高め、UNHCRを始めとする国連機関やNGO(非政府組織)による活動に理解と支援を深める日にするため、制定されました。